

巻頭言 「不安なとき」

宇野 元

東日本大震災の時は、震源地から離れた関東地方でもかなりの揺れがあり、そのうち強い余震が繰り返されました。満員電車の中で、乗客の携帯が一斉に鳴り出した時の緊迫した状況が思い出されます。そして目に見えない放射能への不安がありました。二年前の春、コロナ禍における最初の緊急事態宣言のころ、11年前の不安が重なるのを感じました。

今月は、西部中会に所属する各教会の記録を調査する奉仕をしています。大切な記録が書留で送られてきます。インターホンでの呼び出しのあと、郵便局の人がこんなふうに案内してくれます。「すこし離れたところにいますから、はんこをお願いします。」行き届いた気遣いに今の状況が反映しているでしょう。日常生活のなかに見えないウィルスへの用心が存在しています。目に見えないだけに、居合わせた者たちが思わず目を見合わすような不安がありますね。

出かける時、上着のポケットに忍ばせる「よき力に」。駅のホームや、表通りの傍らや、公園でひらいては暗記し、暗唱します。また思いつくと、私訳を新しくします。第2節。

過去の出来事に心が締め付けられそうになる
困難な日々に押し潰されそうになる
主よ、驚き動揺する心に平安を与えてください
あなたは平安に向かうよう私たちが創られたのですから

「よき力に」が、詩であるとともに、困難な状況での真剣な祈りであることに気づきます。心に不安が群がるとき、差し出されている守りのもとに急ぐ心で、あなたが備えておられる平安を下さい、と主なる神に申し上げます。この祈りはキリスト者の信頼を告白しています。4行目の言葉に心がとまります。平安、と記して、それにボンヘッファーはこうつづけています。

あなたは平安に向かうよう私たちが創られたのですから